



11月になりました。

今年も残すところ2カ月弱。

師走ともなればあつという間、気づけば三が日も終えて、となりそう。冷え込む日も増えてきました。

人も街も冬支度。コタツやストーブと1年ぶりの再会です。

近頃はガソリンや灯油の値段も相当落ち着きました。

必需品だけに助かりますね。

先日、栃尾で美味しいあぶらげをたらふく食べた帰り道、山の上に気になるものを見つけました。

普段見ているのとは形の違う、背の低い鉄塔。ただ、送電線はなく、それぞれぼつん立っています。

夢のあと。

現在、日本有数の天然ガス産出地として知られる長岡。

明治から大正にかけては石油の採取も盛んだったことをご存知でしょうか。

長岡市東部には鋸山、風谷山、大峰山などが連なる「東山丘陵」があり、当時の息づかいを伝える遺物が今も残っています。

『日本書紀』には天智天皇即位7年の年(668年)に越の国から「燃ゆる土」と「燃ゆる水」を献上したと記されているようで、その「越の国」の場所についても諸説あるようですが。ここ長岡地域も古(いにしえ)から続く産出地。石油をまだ「草生水(くそうず)」と呼んでいた江戸時代くらいまでは、自然に浸出したものを採取して、行燈(あんどん)の灯火用などに用いていたようです。時代が明治に移ると、行燈はランプに替わり、あらゆる分野でエネルギー革命が国内で急速に進みます。

明治中期の長岡では、石油で一攫千金を狙う多くの人々が集い、最盛期には300もの石油会社が設立され、山の上は採掘小屋で溢れていたとか。

ゴールドラッシュならぬオイルラッシュですね。

当初の採掘は、手掘りで、石油は缶や樽に入れて人が背負って山を下ったそうです。

その山道も結構な悪路とあって整備されたのが、榎峠周辺の旧道はこの時に整備されたものとか。

ともあれ“産業”と呼ぶべき体制は次第に整い、石油の町長岡が生まれます。

これに伴って機械工業や証券業(石油関連企業を作る際に、株式発行による資金調達が行われたため)も発達しました。

稜線に見た「油井櫓」は、その時代の名残りでした。

長岡興隆の立役者は今も人知れず山の上から長岡の街を見下ろしていました。